紀錄片《倭文（しづり）— 會旅行的構樹》的台灣首次觀影會

ドキュメンタリー映画『倭文（しづり）—旅するカジの木』と台湾初の上映会

Shizuri: The Travelling Paper Mulberry Tree, the Documentary Film's Premiere in Taiwan

文｜石村明子（中日文專業翻譯）
圖｜黃智慧（中研院民族學研究所助研究員）、VISUAL FOLKLORE製片公司

ヴィジュアルフォークロア・北村皆雄監督の『倭文（しづり）—旅するカジの木』（以下『倭文』）は、今年（2024年）5月25日に日本で公開されたドキュメンタリー映画である。神話に出てくる「倭文」という織物をめぐって、第一線で活躍する日本の織物作家たちがそれを再現しようとする過程や、古代の織物の材料であったカジノキのルーツとその拡散、倭文とそれにかかわる神話などが絡み合って構成されている。

ドキュメンタリー映画『倭文（しづり）—旅するカジの木』のポスター。ヴィジュアルフォークロア提供。

紀錄片《倭文（しづり）—會旅行的構樹》的海報。VISUAL FOLKLORE製片公司提供。

ヴィジュアルフォークロア・北村皆雄監督の『倭文（しづり）—旅するカジの木』（以下『倭文』）は、今年（2024年）5月25日に日本で公開されたドキュメンタリー映画である。神話に出てくる「倭文」という織物をめぐって、第一線で活躍する日本の織物作家たちがそれを再現しようとする過程や、古代の織物の材料であったカジノキのルーツとその拡散、倭文とそれにかかわる神話などが絡み合って構成されている。

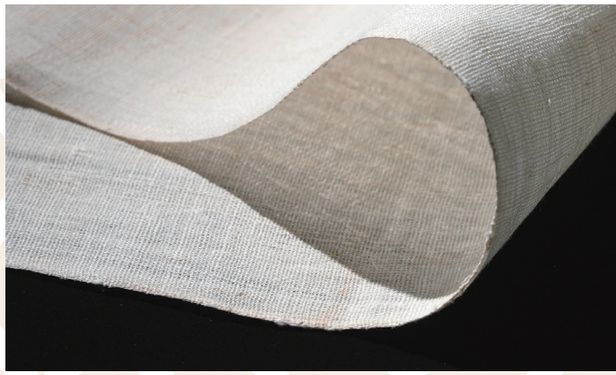
この映画はドキュメンタリーであり、事実に基づく取材が行われているのはもちろんであるが、学説の紹介やアーティスティックな要素を取り入れるなど、さまざまな様相を呈している。

最初に映画の公式サイトを見て面食らったのが、ドキュメンタリーなのに実力派のキャストの名が連ねてあったことだった。彼らによって幻想的な神話のシーンが再現され、今と昔の倭文やカジノキの旅について語られる。

織物作家たちの挑戦も大変印象深い。伝統的な技術を駆使する映像はほかのドキュメンタリーでもよく見られるが、この映画ではそこからさらに新たな創造へと踏み出している点がユニークであり、未知の布を創ろうとする作家たちの挑戦と飽くなき追求には感服するばかりである。繊維を取り出すために実験を行ったり、作品を作るのに試行錯誤を重ねたり、カジノキを自分で栽培したり、ベンガラの材料となる土を取りに山に分け入ったり・・・。そしてこれらの過程は細やかに映像として記録されている。

また、この映画のスケールを大きく広げているのが、広範囲にわたる国内外での取材と調査である。国内ではカジノキやコウゾを使用した織物である太布（たふ）の伝統が残る徳島県をはじめ、カジの葉をご神文とする長野の諏訪大社、倭文や星の神・香香背男（かがせお）の伝説に関わる各地の神社や古墳、作家たちの工房、和紙のふるさとの福井県、カジノキの拡散にかかわる沖縄、と各地に及んでいる。また台湾をはじめ、パプアニューギニア、インドネシアのスラウェシ、フィジー、トンガなど、カジノキを使用して作られる太平洋各地のタパ（樹皮布）も紹介されている。

倭文やカジノキに対する調査や指摘も大変興味深い。映画では、文化財や古文書、古墳などの映像、関東各地の神社や大嘗祭で供える織物についての取材などを通じて、倭文という織物や倭文神についての考察が行われている。また、本来であれば樹皮を叩いて作るタパが先に存在し、その後、織りという



徳島県の三木家に伝わるカジノキの繊維で織られた「木綿（ゆう）」。皇紀2600年（昭和15年）を記念して織ったと言われる。カジノキ由来の織物はその白さが特徴だ。ヴィジュアルフォークロア提供。

德島縣的三木家傳下來的「Yuu（寫為“木棉”）」，由構樹纖維製線編織，據說紀念皇紀2600年（昭和15年 / 1940年）編織的。潔白的顏色為構樹織物的特色。VISUAL FOLKLORE製片公司提供。

見展現傳統技術的場景，但在這部影片中，傳統的技術再進一步衍生到創造新的作品，這一點可以說是這部影片的獨特之處，也非常佩服影片中的藝術家們，他們展現了挑戰創新、孜孜不倦地追求未知布條的精神。他們為了進行提取纖維的實驗，自己種植構樹，並為了創作作品，不斷地嘗試錯誤；為了尋找Bengara（土紅色的顏料），親自爬山收集紅土……而這些過程，都被細緻地記錄成影像。

這部電影的規模之所以如此龐大，是因為進行了廣泛的國內外採訪和調查。在日本國內訪問的地方包括：仍然傳承抽取構樹纖維製線來織成「太布」的德島縣、將構樹葉作為其「御神紋」的神社「諏訪大社」所在地的長野縣、與「倭文」或星神「香香背男」的傳說有關的各地神社與古墳、位於日本各地的大師們的工作室、日本和紙的故鄉福井縣，以及跟構樹傳播有關的沖繩縣。在影片中還介紹了台灣、巴布亞紐幾內亞、印尼蘇拉威西島、斐濟及東加的Tapa（樹皮布，拍打構樹皮製成）。

對「倭文」和構樹的調查與探討也非常有趣。這部影片透過文物、史料、古墳等畫

《倭文（しづり）— 會旅行的構樹》是由VISUAL FOLKLORE製片公司的北村皆雄導演製作的一部紀錄片，自今（2024）年5 月 25日起在日本開始上映。

該電影描述活躍在第一線的日本織布大師們，嘗試重現日本神話中的「倭文」布條的過程，並介紹作為古代紡織品材料的構樹及其起源和傳播範圍；也說明「倭文」和相關神話，將這些因素交織成一部電影。

這部電影是一部紀錄片，以根據事實的調查為基礎之外，還引用學術研究成果，融入藝術元素，呈現出各種不同的樣貌。

當初筆者看了電影官方網站後，就覺得不可思議，為什麼在紀錄片中會出現幾位實力派藝人的名字？原來在影片中由他們重現神話的奇幻場景，講述當今與往昔的「倭文」及構樹的「旅行」故事。

編織大師們挑戰製作的情景，也讓人留下很深刻的印象。在其他紀錄片中也經常可

高度な技術が登場したと考えられるのであるが、台北植物園の遺構から出土したカジノキの種や、埋蔵文化財であるタパビーターや紡錘車の存在から、台湾にはその両方が同時に存在したという点を指摘している。さらに台湾史前文化博物館でのカジノキのルーツに関する取材や、静岡大学でのカジノキのDNA鑑定を通じて、日本のカジノキは沖縄のものは台湾由来であり、九州以北は中国由来のものであるとしている。

壮大なスケールを持つこの映画は制作に5年かかっているが、国立政治大学の日台原住民族研究フォーラム（台日論壇、以下フォーラム）当日の質疑応答によると、準備期間を含め7年の年月を費やしたとのことである。

ところで、このような大作がなぜ日台原住民族研究フォーラム（台日論壇）で上映されることになったのか。

日台原住民族研究フォーラムは日本と台湾の原住民研究者の交流を目的とした研究発表を中心に2008年から毎年行われ、今年は17回目の開催となった。2、3年に一度テーマを設定し、地方で大きめの規模で行うが、去年は日月潭で開催したため今年は政治大学でこぢんまりと行う予定だった。例年通り、日本の原住民研究の先生方に発表内容などについて問い合わせたところ、都留文科大学の山本芳美先生から北村皆雄監督の作品の上映会を薦められ、いくつか候補の作品を上げていただいた。そしてこれがフォーラムで上映をする契機となった。当初、上映直前であった『倭文』については、作品の新しさや規模からフォーラムで上映することになるとは思いもよらなかった。しかし、北村監督のご厚意により台湾での初上映が叶い、フォーラムでの上映することとなったのだ。

とはいえ、映画の上映は簡単なことではない。台湾で上映するには字幕を付けなければならないが、翻訳を業者にお願いすると予算をはるかにオーバーしてしまう。個人的なことになるが、筆者は生きている間に一度でいいから字幕翻訳をやりたいと思っていたので、これは渡りに船とばかりに翻訳のオファーをしたところ、ネイティブチェックを台湾の方にお願いするという条件付きで承諾していただいた。翻訳をしながら誰にチェックをお願いしようかと考えていたところ、棚から牡丹餅とでも言わんばかりに、日本語にも民族学にも精通する中央研究院民族学研究所の黄智慧先生から数年ぶりにご連絡をいただき、字幕チェックの話をしたところ、快く引き受けてくださったのである。また、字幕を映像に付けてくださったヴィジュアルフォークロアの髙橋さんが中国語のわかる方だったというのも大変幸運なことだった。

上映会の看板の前。左から山本芳美先生、北村皆雄監督、王長華館長、黄智慧先生、筆者。黄智慧先生提供。

在觀影會的立牌前面合照。山本芳美教授（左一）、北村皆雄導演（左二）、筆者（右一）、黃智慧教授（右二），王長華館長（右三）。（黃智慧教授提供）

北村皆雄監督。ヴィジュアルフォークロア提供。

北村皆雄導演。VISUAL FOLKLORE製片公司提供。

当初、フォーラムの会場は例年同様、政治大学敷地内の山の上にある研究創新育成センター（Research and Innovation-Incubation Center, RIIC）の会議室を使用する予定であったのだが、ちょうど総合院館5階の国際会議庁がリニューアルしたばかりということで、そちらで行うことになった。直前に落雷で放映機器が故障したり、冷房や備え付けのマイクの調子が悪かったり、同じ階のお手洗いが改装中だったり、おまけに台風10号の影響で日本の参加者が台湾に来られなくなるのではという心配事まであったりと多少のハプニングはあったものの、『倭文』の上映会も含めて今年もつつがなくフォーラムを終えることができたのは何よりであった。この場を借りて関係者の方々には改めて感謝申し上げたい。

この映画の制作には台湾でも多くの方々が関わっており、ぜひスクリーンのきれいな映像で見ていただきたかったのだが、残念ながら参加できたのは一部の方のみであった。しかし、すでに台東での上映についての打診もあると耳にしており、台湾で再び上映される日も近いのではないかと期待している。

面，以及日本關東地區各地神社，與在「大嘗祭」（天皇皇位繼承儀式）時供奉織物的調查，進行探討織物「倭文」及「倭文神」是何物。另外，一般認為，最早是以拍打樹皮製成樹皮布，後來才有像編織這種更高級的技術；但在這部影片中指出，在台北植物園遺址，出土了許多構樹種子、樹皮布拍打棒及紡錘，從這些出土物可以證明，在台灣樹皮布拍打與織布編織兩種技術同時存在。此外，關於構樹的起源，根據台灣史前文化博物館的採訪及靜岡大學對構樹的基因鑑定結果，導出的結論是，日本的構樹有2個系統：沖繩的構樹起源於台灣；而九州以北的構樹起源於中國大陸。

這部作品宏大壯闊，製片耗時5年；其實今年在國立政治大學原住民族研究中心（以下簡稱為政大原民中心）舉辦的台日原住民族研究論壇（以下簡稱為台日論壇）中，導演提到包括準備期在內，前後花了7年的時間。

在此也說明一下，為什麼政大原民中心在今年舉辦的台日論壇中，會安排這部影片的觀影會呢？

台日論壇自從2008年起每年舉辦一次，今年已是第17屆；每隔2到3年設定主題，在外縣市舉辦一次規模較大的論壇。因為去年在日月潭舉辦，所以今年在政大校內舉辦小規模的論壇。與往年一樣，筆者在詢問日本學者論壇中的報告題目時，日本都留文科大學的山本芳美教授建議，在論壇放映北村皆雄導演的幾部影片作品；這就是在台日論壇上放映《倭文》這部電影的契機。當時《倭文》即將在日本公開上映，因為作品太新，規模也很大，所以萬萬沒想到，後來真的在台日論壇上播放。不過多虧了北村導演的好意，這部電影得以在台日論壇中放映，並成為台灣的首次觀影會。

然而，放映一部電影並不是一件容易的事。電影要在台灣上映，必須有字幕，但如果聘請翻譯公司，就遠遠超出主辦方的預算。就筆者個人而言，一直希望在有生之年，能從事影片字幕翻譯，剛好機會在眼前，於是毛遂自薦，詢問導演是否可以由筆者來翻譯字幕、再由台灣翻譯核對中文譯文的前提下，獲得了導演的同意。筆者邊翻譯邊想，到底要請誰來核對譯文？這時剛好接到中研院民族學研究所的黃智慧教授的電話，她無論是日文還是民族學都很精通；跟她也好幾年都沒有聯絡了， 但稍微提到字幕工作的情況，教授就爽快地接受核對工作；真是福從天降！我們也很幸運，VISUAL FOLKLORE製片公司的高橋小姐在影片上添加字幕，她也懂中文，使得字幕相關工作進行得很順利。

台日論壇若在政大舉辦，通常會在政大山上校區的研創中心（RIIC）會議室舉行。今年原定在山上舉辦，但由於山下綜合院館5樓的國際會議廳剛整修完畢，場地最終改到那裡。後來遇到了一些小麻煩，如論壇前幾天因為雷擊，導致播放設備故障、冷氣和配備的麥克風出了問題、同一樓層的洗手間臨時整修中、剛好第10號颱風「珊珊」經過日本，讓人擔心日本學者們無法來台等等，雖然發生了這些小插曲，但包括《倭文》的

台湾では民族誌映画祭も開催されているので、台湾で再度お目にかかることができればこの上なく嬉しく思う。

最後に北村監督について紹介したい。とてもパワフルで若々しい方だが、実は1942年生まれである。長野県出身で1965年の大学卒業後から記録映画やテレビドキュメンタリーの演出をしており、ヒマラヤなどの秘境をはじめとする数多くのテレビ番組を制作する一方で、諏訪の古代史探究など日本文化の古層にも多方面にわたってアプローチし、映像と文筆によって独自の「映像民俗学」を開拓してきた。ライフワークである沖縄・久高島の記録は1966年以来、現在も続けており、久高映画の集大成が待たれる。なお、日本語がメインではあるがヴィジュアルフォークロアが企画する「エトノスシネマ」という動画配信サイト（有料）では監督の作品をはじめとする映像が視聴できるので、ご興味を持たれた方にはぜひご覧いただきたい。また、『倭文』は現在も日本各地のミニシアターで上映中である。日程と上映映画館は『倭文』の公式サイトで確認できる。こちらも機会があればぜひご覧いただきたい。◆

作者簡介

石村明子

日本北海道札幌市人，1970年生。國立政治大學民族系碩士。現任專業中日文翻譯。曾在台擔任日語教學及日文秘書等工作。目前主要從事中日文翻譯工作，長年擔任政大原民中心《原教界》日文翻譯及台日原住民族研究論壇的口譯工作。

觀影會在內，今年的論壇終究是圓滿結束。筆者也想藉此機會，再次向參與這次活動的所有人，表示感謝之意。

其實在台灣也有很多人參與這部電影的製作，也希望他們能夠在高畫質的螢幕前觀賞，可惜大家都很忙，只能邀請其中的少數幾位參與。不過，聽說已經有人跟導演建議在台東舉辦觀影會；我們應該很快就會聽到本片將再度在台灣放映的消息。台灣也有舉辦國際民族誌影展，如果在影展中再次觀賞到《倭文》一片，將令人感到無比高興。

最後介紹一下北村導演。他是一位非常有毅力的人，看起來也很年輕，但他實際上是1942年出生的。他出生於長野縣，自1965年大學畢業以來一直執導電影紀錄片和電視紀錄片，除了製作與喜馬拉雅等世外秘境相關的許多電視節目之外，如探究諏訪地區（現長野縣）古代歷史等，還從多面向觀點調查古老的日本文化底層，並以影像與撰寫來開拓「影像民族誌」領域。沖繩久高島的紀錄工作可以說是他的畢生事業，從1966年開始一直持續到現在，也讓人期待他即將完成久高電影的集大成。

另外，VISUAL FOLKLORE製片公司經營「Ethnos Cinema」的影片發佈網站（收費），雖然以日文為主（也有少數英文影片），但可以觀賞到北村導演與其他導演的作品，有興趣的朋友不妨前去一看。再來，《倭文》目前仍在日本各地的迷你電影院上映，電影院名稱和上映時間，可以在《倭文》的官方網站查詢，若有機會，千萬不要錯過。◆

手機掃描QR CODE　填寫「讀者回函」

歡迎您上網提供對本刊的具體建議，以做為未來編輯參考。

感謝您閱讀本期《原教界》。本刊是台灣原住民族教育的唯一雜誌，內容涵蓋原住民族教育之最新情報、政策評論、校園報導、會議訊息、新書評介等，為原住民族教育工作者及研究者提供新知識與新趨勢，已發行19年共119期，並已全文上網（查「政大・原住民族研究中心」或「ALCD」）。